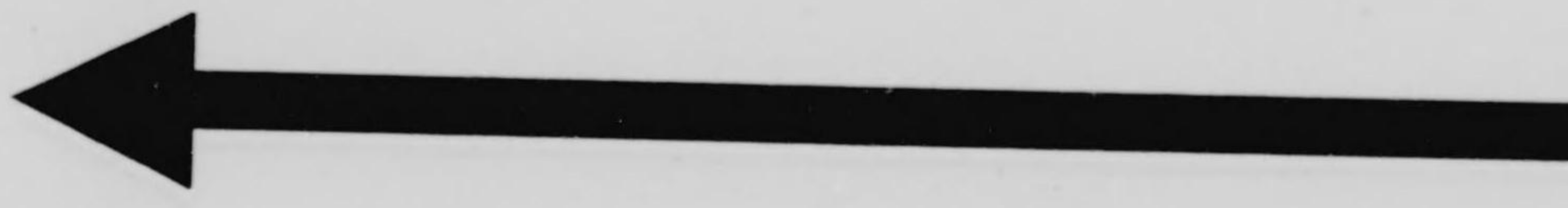




364
126



始



美辭名句叢書

7

トルストイ美辭名句集

364-126

トルストイ美辭名句集

内外
豪華
美辭
名句
叢書

大正
6. 8. 30
内交

はしがき

大陸文學に一種の深刻味のあることは總ての批評家の一致する所であつて、此意味に於てもトルストイの文字は、大陸文學の星座中に光輝ある一の地位を要求するに足るものである。トルストイは現代生活の解剖して直ちに吾々の面前に突附ける。唯だに突附けることに満足しないで、ドス黒い血に塗みれた此巨大なる醜惡なる怪獸の腹綿を吾々の面上に擲きつける。そして此間にトルストイ一流の描寫と技巧とがある。トルストイは人をして讀ましめるばかりでなく考へさせる。考へさせるばかりでなく何等かの決論に到達させる。此意味に於てトルストイは大陸文學の諸星座中に最大の光輝を放つものである。

大正六年二月

編者

目次

30
28
28

宗教及人生觀……………一
 哲 學……………二七
 結婚と性慾問題……………三三
 藝 術 觀……………三九
 勞 働 觀……………四三
 戰 争 論……………一〇一
 天 然 描 寫……………一〇九

小 傳

ヤスナヤ・ホリヤナ村、伯爵ニコライ・イリイキチ・トルストイ第四男レフ、一八二八年八月二十八日生、同二十九日洗禮、司祭ワシリイ・イウノキチ・ヤズイコフ、代母男爵夫人、ペラーダヤ・トルストイ。之が教會に於ける吾がレオ・トルストイの戸籍面である。トルストイ伯爵家はロシアの名門の一つで、吾がトルストイの高祖父にはペオトル・アンドレキチの如き人がある。父ニコライ・イリキチ・トルストイはナポレオン戦争に出陣した一貧乏貴族で、僅かにマリヤ・イワノヴナ・チルコンスカヤといふ時めいた侯爵家の、而しながら甚だ醜いお姫様を妻に迎へ、辛うじて財政の難關を切抜けた。吾がトルストイは、此二人の間にてきた末子として、『我が小ひさなベンヂヤミン』と呼ばれて、いとも可愛

がられて大きくなつた。

母はレフが二歳の時に、父はその九歳の年に一家を纏めてモスクワに移住する
と間もなしに不歸の客となつた。トルストイの幼年時代は斯くて叔母なる伯爵
夫人「エリナ叔母」の後見の下に過ごされた。エリナ叔母の歿後、トルストイの
一家はトゥラからカザンに移つて、其所なる叔母メラレーダヤの家に養はれた。彼
の少年時代は此處で送られた。

トルストイの青年時代は一八四四年、カザン大學入學に始まつた。當時トル
ストイの志望は恐らく外交官たらんとするにあつたから、東洋語學科を選ん
だが、一年の後に法律科に轉じた。けれども大學の學課は終に彼を満足せしめる
ことができなかつた。トルストイの青年時代は若い男と女との集る社交と舞踏
と夜會とに殆んど其大半が費やされた。トルストイは社交界に足を歩み入れると

共に、幼少の頃から氣にしてゐた自分の容貌の醜いことが、如何にも酷どく氣に
なりだした。

斯くてトルストイの青年時代は遊蕩生活の間に送られたが、而かも遊蕩生
活は必ずしも彼の生活の全てでは無かつた。當時トルストイは露都に出て、
實務家にならうとも思ひ、或は寧ろ士官となつてウエングル軍に加はらうかとも
思つてゐた。一八五一年、コーカサスの軍隊から長兄ニコライが賜暇を得て歸
省したのを機會に、終に少尉候補生としてコーカサスに往つた。

トルストイの軍隊生活が、總ての軍隊生活と同じやうに、女と酒と歌と
掠奪との生活であつた事は云ふ迄でもない。其間又たトルストイは屢々實
戦の間をも出入した。けれども、トルストイは軍隊生活の閑暇を偷んで其處
女作「幼年」を露都なるソウレーメンニク雜誌に投稿した。時に一八五二年の七

月であつた。一八五四年、クリミア戦争の勃發と共に、ドネーブル軍に加はり、後更にセヴァストポリル籠城軍に加はつて最後まで止つた。彼の『樵夫』、『少年』、『セヴァストポリル』の諸篇は此戰場からの産物であつた。

『セヴァストポリル』が公にされて、中央文壇の耄宿たるツールゲニエフをして『涙に浸つてウラー』を叫ばしめた。折しもトルストイは、當時軍隊内に流行したセヴァストポリルの歌といふ軍事當局を非難した諷刺の作者と目指されたので、一八五六年、終に軍職を退かなければならなかつた。斯くて軍隊から追はれたトルストイは、花形役者として中央文壇に迎へられたのである。

一八六二年以來、トルストイはヤスナヤ・ポリヤナに歸臥して専ら教育事業に傾倒したが、間もなく之もよした。此頃よりトルストイには内生活の危機が切迫した。一八六二年以後のトルストイの生活の總ては、實に懷疑と煩悶との時代

であるといふことができる。

此慘憺たる内生活の苦悶の裡から、トルストイは終に光明と解決とを握つて再び現はれた。『我が懺悔』、『我が宗教』などは實に此時代の産物であつた。

斯くて吾がトルストイは、藝術の人の人から更に人道の人となつた。けれども彼は尙ほ之によつて解決を得ることが出来なかつた。要するに彼の藝術は人をして考へしめるもの、自ら決論を竟めしめるもの、即ち問題の提出であつて、問題の解決ではなかつた。一九一〇年十一月十日の朝四時、八十歳のトルストイは、ヨリ眞實なヨリ眞統な生活を求めて家出をした。

一九一〇年、十一月十二日發倫敦發電は次の如く報告した。『露國文豪トルストイ翁は他人に知られざる或目的の地に赴きたり、是全然隱遁して其末年を終らんとする爲なり』更に十三日の浦鹽發電は次の如く註釋した『トルスト

イ伯は十日突然夫人に一書を遺し、最早歸來せざることを書き置き何處へか隠遁したり』

六

越えて二十一日、ロイテル電報は突如として吾がトルストイの計を傳へた。トルストイの葬式はヤスヤナ・ポリヤナの百姓によつて極で質素に営まれた。行列の先頭には、二人の農夫によつて、一旛の銘旗が押立てられた。その旗には次の如くに誌るされた。

『君が善行の記憶は吾等の間に死せざるべし。
ヤスヤナ・ポリヤナの遺孤、農夫等』

著作年表

- 1828
- | | |
|-------------------|------------------|
| 幼年(一八五二) | 入寇(一八五二) |
| 少年(一八五四) | セバストポール(一八五四―五五) |
| 青年(一八五五―五七) | コサック(一八六一) |
| 十二月黨(一八六三―六八) | 戦争と平和(一八六四―六九) |
| アンナ・カレニナ(一八七二―七六) | 獨斷神學の批評(一八八〇) |
| モスクワ民勢調査(一八八二) | 教會と國家(一八八二) |
| 我が信仰(一八八四) | 我等何を爲すべき乎(一八八六) |
| イワン・イリイツチの死(一八八六) | 心的活動と手の勞働(一八八八) |
| クロイツェル・ソナタ(一八八九) | 無抵抗論(一八九〇) |

七

- 飢饉に就て(一八九一—一九三)
- 神の國は爾の内(一八九三)
- 兵役拒絶の意義(一八九三)
- 基督教と愛國心(一八九四)
- 主人と僕(一八九五)
- 耻辱(一八九五)
- 基督教の教へ(一八九六)
- 藝術とは何ぞや(一八九七)
- 海牙平和會議に就て(一八九九)
- 復活(一八九九)
- 現代の奴隸制度(一九〇〇)
- 愛國心と政府(一九〇〇)
- 露帝及び其協力者に與ふ(一九〇一)
- 労働階級の問題に就て(一九〇二)
- 露帝に與ふるの書(一九〇二)
- 労働者に與ふるの書(一九〇二)
- 宗教會議に與ふるの書(一九〇二)
- 社會改良家に與ふるの書(一九〇三)
- 賢哲の思想(一九〇四)
- 爾曹悔改めよ(一九〇四)
- 一大不正(一九〇五)
- 露西亞に於ける社會運動に就て(一九〇五)

- 讀書の一週記(一九〇六)
- 唯一の土地問題解決法(一九〇七)
- 余は黙するを得ず(一九〇八)
- 日々の爲めに(一九〇九)
- ストックホルム平和會議に寄するの書(一九〇九)
- 有効なる救済策(一九一〇、死後三日前露都の新聞に掲載されたるもの絶筆なり)
- トルストイの著作及び論文は其數約二百に達して居る。茲には其中より最も著名なるもを選抜した。

宗教及人生觀

人は他人の生活するが如く生活す、而して其生涯は曾て教へられた主義に依らず、反つて其正反對の主義に依りて指導せらる。信仰は人の生涯に何等の勢力を存せず、又た人と人との關係の上にも何等の影響を及ぼさざるなり。信仰は實生活以外の境域に放逐せらる。若し此の信仰と生活との二者が、一度相接觸する場合ありとすれば、信仰は其時單に外見上の形式となりたり、人生を形成する主要なる部分として亦た存在することなきなり。(我懺悔)

幼時の宗教的教訓の勢力は、漸次自ら成長して自己の智識を得、且つ人生の實際的經驗——而かも多くは其主義に於いて反對なる經驗——を積むに及びて、次第に消滅するに至ること多し。(我懺悔)

余が唯一の信仰は、即ち單純なる動物的天性を離れて余が一生を支配せる信仰は、人は完全の域に達し得べしとの信念なりき。(我懺悔)

余は戦争に於て人を殺しぬ。余は他人を倒さんと欲して決闘をなしぬ。余は骨牌に負けて太く損毛せり。余は農民の膏血を絞りて得たる財物を浪費し、而かも彼等を嚴罰せり。敗徳なる婦女等と淫樂せり。而して多くの人を欺きぬ。虚言、窃盜、各種の姦淫、醉醜、暴虐、殺人等、凡ての罪惡は一として行はざるところなき余は、猶ほ余が同輩等によりて比較的に道徳の人として尊敬せられぬ。嗚呼是れ余が十年間の生涯なりき。(我懺悔)

余が産業を處理し、余が子女を教育し、余が著述をなさんとする前に、余は

何が故に此等のことを行はんとするかを知らざるを得ず。余自身の行為の理由を知らずんば、余は何事もなすこと能はず。(我懺悔)

我何故に生活するか、限りなき細微の分子が無限なる空間と時間とに於いて、無限なる離合をなし、而して永遠に其の形状を變ず。爾若し此の變化の法則を學ばば、爾の何故に生活するかの理由を知らん。(我懺悔)

余は欺き得られざりき。萬事は皆な空なり。不幸は現在に生るゝことなり、死は生より勝る。生命の重荷終に脱却せざるべからず。(我懺悔)

理性は實に我が裏に働けり、去れど猶ほ他に一物ありて、同じく我が裏に働け

り——即ち余が人生の直覺的意識と稱する一物是れなり。(我懺悔)

我は基督の教義を信ず、而して我は地上に於ける完全なる幸福は總ての人々がこの教を信する時のみ可能なるを信ず。(我宗教)

我は基督の道を信ず、假令他人は此道に従ふものなく、之れが實行に従事する者は唯だ我一人なりとも、余は之れがために自ら此道に従ふを禁すること能はず、如何となれば余は唯此道によりて永遠の滅亡より我生命を救へばなり。(我宗教)

○ 今や余は之を悟れり、凡て他人に對して謙遜なる者、自らを以て凡の人の僕

たらしむる者、唯だ斯の如きの人のみか眞に何人よりも優れる者なる事を。(我宗教)

余は曾て世上の最大快樂と思ひし暖衣飽食肉慾美感の生涯は、今や余の全然唾棄する所となれり。而して單純にして貧窮なる生活(肉慾を緩和する生活)は、今や余に取りて最も善なるものとなれり。(我宗教)

夫れ眞理は行爲に現はれて初て能く眞理たるを得べく、又初て人より人に傳達す。(我宗教)

唯だ實行に顯はれたるの眞理のみ能く各人の良心に光明を齎らし來り、以

て誤謬の羈絆を截ち自由豁達の人たらしむ。(我宗教)

理性の光の發揮せらるゝ時、其時我等は基督の道に就らん。(我宗教)

他人のためにする勞働、貧賤、謙讓、財産及び特權の放棄は我の以て善且つ要なりとする所なり。(我宗教)

我は我が心の常に吸引せらるゝ至善なるものは、即ち是れ生命の本體なる天父の聖旨なることを悟り且つ之を信す。(我宗教)

如何に吾人が自己の理性の能力を卑下するとも、吾人は吾人の衷心に於て、

時^{とき}としては吾人^{ごじん}の行爲^{かうゐ}を賞讃^{しょうざん}し、時^{とき}としては之^{これ}を譴責^{けんせき}する所^{ところ}の、一種^{しゆ}の判^{はん}の在^ありて存^{ぞん}するを自覺^{じかく}せざるを得^えざるべし。(我宗教)

夫^それ人^{ひと}の信仰^{しんかう}は其基礎^{そのきそ}を人生觀^{じんせいくわん}の上^{うへ}に存^{ぞん}す、換言^{くわんげん}すれば信仰^{しんかう}は善惡^{ぜんあく}の判別^{はんべつ}に外^{ほか}ならざるなり。(我宗教)

行^{おこなひ}なきの信仰^{しんかう}は必竟^{ひつきやう}是れ信仰^{しんかう}に非^{あら}ず、是^これ單^{たん}に或物^{あるもの}を信^{しん}ぜんと欲^{ほつ}する心^{こころ}の傾向^{けいかう}にして、人^{ひと}の眞^{しん}に信^{しん}ぜざる所^{ところ}のものを信^{しん}じたりとする一種^{しゆ}の空認^{くうにん}たるに過ぎざるのみ。(我宗教)

夫^それ生命^{せいめい}の教^をは信仰^{しんかう}の基礎^{きそ}にして、諸々^{もろく}の行^{おこなひ}は自然^{しぜん}に信仰^{しんかう}より發^{はつ}するものなり。(我宗教)

リ。(我宗教)

人生^{じんせい}の目的^{もくてき}は此^この空^{くう}なる一生^{しやう}の後^{のち}に、眞正^{しんせい}なる生命^{せいめい}は開始^{かいし}せらるゝなりと信^{しん}するに在^あるのみ。(我宗教)

人^{ひと}は自己^{じこ}の肉體^{にくたい}の生命^{せいめい}と共に死亡^{しはう}せざる他^たの物^{もの}の爲^{ため}に活^いくるなり。(我宗教)

生命^{せいめい}の父^{ちち}の聖旨^{せいし}は、利己^{りこ}的^{てき}箇人^{こじん}的^{てき}な一生^{しやう}涯^{がい}に有^いせずして人^{ひと}の子^こが其^{その}父母^{ふぼ}に對^{たい}するが如^{ごと}き孝^{かう}心的^{てきしやう}生涯^{しやうがい}に在^あり、(我宗教)

吾人^{ごじん}の生^{せい}を此世^{このよ}に享^{かう}くるは唯^{ただ}夫^それ之^{これ}によりて眞^{しん}の生命^{せいめい}に達^{たつ}せんがためにし

て、之に達するの道は唯だ此世の幻影的社會を否認するに在り。(我宗教)

我は固く信じて疑はず、今より二三世紀の後、現代の學術的活動の歴史は後世の人の話頭に上りて、洪笑の種となり若くは憐愍の具とならんことを。

(我宗教)

人の墮落と贖罪との「ドグマ」は最も貴重なる人間各自の活動を妨止したり、自己の生涯を善良幸福ならしむべき一切の自重心を剝奪したり。(我宗教)

學術と哲學とは到底人心の判官たること能はず、彼等も亦た必竟人心の奴隸たるのみ。(我宗教)

凡ての喜悦と壯觀とを有する地上の人生——暗黒と理性の争闘たる人生、世界の萬民が曾て己に送りたる生命、而して現に心裡の争闘と勝利とを以て余の送る所の人生——凡そ此れ真正の生命にはあらず。(我宗教)

真正なる生命とは他なし、罪なきの生命、唯だ信仰によれるの生命、換言すれば狂人の空想中にのみ存するの生命是れなり。(我宗教)

真正なる宗教は人類の間に存する敵意を撲滅するにあり。(我宗教)

最初我々に變に思はれる現象、生活の浮動、生活の硬直、意識の分裂、

これらの現象は凡て信仰の缺如から起るものである。(人生論)

人生の總ての矛盾を解決して最大なる幸福を與へる感情を人々は知つてゐる。此の感情は愛である。(人生論)

愛の感情は死の恐怖を絶滅するばかりでなく、人をして他人の幸福のために自己の肉體上の存在を極端な犠牲に投ぜしめさへするのである。(人生論)

愛は將來にはない。愛は唯現在の活動である。現在に愛を發表しないでは、愛を持たない人である。(人生論)

人の愛の發現を妨ぐるものは人の肉體と動物性となり。(人生論)

眞の愛のみ獨り眞の炯眼と智慧とを與ふ。(一日一訓)

近より愛せよ。遠きに。(一日一訓)

信仰の眞の機能は死の事實が破壊し能はざる生にまでの意義を捉ふることなり。

(一日一訓)

信仰は生の力なり。(一日一訓)

我等の信仰は生の事實についての我等の理解に矛盾してはならぬ、却て之を照し、明うし、總ての我々の智識に齋にあり。(一日一訓)

祈は人の過去及び現在の行爲の試験なり、而して靈魂の最高の要求に適ふ。(一日一訓)

眞の宗教的感情は常に人によつて自覺される。彼自身の脆弱なること、孤獨なること、又有罪なることによつて。(一日一訓)

宗教のない人は心臓のない人ほど駄目である。(一日一訓)

總ての宗教は、「我が生の意義は何ぞや」との間に對する答案なり。而して宗教的の答は常に適當なる道德法を含む。(一日一訓)

宗教は合理的 人性の缺くべからざる條件たらざるべからず。(一日一訓)

眞なる信仰に於いては人は神が彼の奉仕の對照たることを要す。(一日一訓)

宗教なしには人は眞に人を愛すること能はず、而して人々を愛することなしに人は彼等は何を要するかを知ることを能はず、又何がより多く必要であるか、何がより少なく、必要であるかを。(一日一訓)

人は彼の我を動物的存在より彼の靈的存在にまで移さればならぬ、而して要求を満足させればならぬ、彼の動物的要求ではなく、彼の靈的天性の要求を。(一日一訓)

動物的存在にまで人の我の遷移は基督の教訓の本質として横はる。(一日一訓)

宗教は、活力ある其他の何物でも如く、生れ、發達し、老い、死し、復た活氣つき、常に前よりも多く完全なる形に於いて活氣づく能力を有す。(一日一訓)

腐敗せる信仰に於いては人は神が彼の捧物や祈のかけりに返報として人の僕たむことを要求す。(一日一訓)

生命は人に與へられた、唯彼が宇宙の生命に奉事すとの條件に於て。(一日一訓)

宗教なくしては、人は合理的生活を送ること能はざるなり。(一日一訓)

悔恨は眞理ほどには恐しからず、されど兩者とも一様に善に人を進ましめまた果實を結ぶ。(一日一訓)

基督の全き積極的の教は唯此の一語にあり。曰く、神を愛し、爾自身の如

く爾の隣人を愛せよ。(一日一訓)

葛藤することは眞の生命なり、而して其の中に獨り生のみあり。其處には休息はあらず。(一日一訓)

迫害は靈的向上の必要條件なり。(一日一訓)

敵意、憎悪の感情は人を殺す。(一日一訓)

神の意志を遂行し以て最高の個人的安寧に到達せざるべからず、最高の個人的安寧とは何ぞや、曰く靈的平和と自由と喜びとを享有するにあり。(一日一訓)

生の目的は快樂及び苦痛の外に在り。(一日一訓)

生の自覺は動く所の形より、力の本質即ち永遠無限の神の意志にまで移さるゝならん。(一日一訓)

我等が我等を貫く人の生命と同じ方角に我等自身を置かば、個人的生命の幻は忽ちにして消えん。(一日一訓)

唯獨り存し、又有したる、又存すべき我が如何で死すべしと恐るべきや。(一日一訓)

人間の情慾——忿怒、意地悪、復讐心、甚だしいのは性慾的戀愛、奢侈と榮譽と偉大とを欲する傾向なども、みな神々の性質である。(光の中に歩め)

正しい生活をするためには、わたしたちは神々を崇敬し、眞理を求めたり考へたりしなければならぬ。(光の中に歩め)

人間は「思煩」によつて「愛」によつて生くるものである。(人間は何によりて生活するものなるか)

人は父母がなくなるとも、生命を繋いで行くことが出来るが、神様がなくなるとは生命を繋ぐことは出来ません。(人間は何によりて生活するものなるか)

今の人(ひと)は自分の労働(ろうど)によつて生活(せいかつ)せず、又隣人(りんじん)を羨(うらや)むからです、古人(こじん)は斯(か)様(やう)には生活(せいかつ)しませんでした、古人(こじん)は神(かみ)を畏(おそ)れながら生活(せいかつ)しました、何故(なぜ)ならば自分のもの(もの)を有(も)つて居(ゐ)る者は他人(たにん)のもの(もの)を欲(よ)望(ぼう)せぬからであります。(穀粒(こくりつ))

若(も)し人(ひと)の子(こ)が一(ひ)つとつ(つ)の林檎(りんご)を取(と)つた爲(ため)に一(ひと)と鞭(むち)與(あた)へる(こと)とすれば我(われ)等の罪(つみ)のためには我(われ)等(ら)は何(なに)んな罰(ばつ)を受け(う)ければならぬでせうか。(愛(あい)する處(ところ)に神(かみ)あり)

私(わたし)は生(い)きようと思(おも)ふ、私(わたし)は生(せい)命(めい)の道(みち)を進(すす)まうと思(おも)ふ。(光(ひかり)の中(なか)に歩(あ)め)

汝(なんぢ)に榮(さか)えあれ！汝(なんぢ)に榮(さか)えあれ！主(しゆ)よ！汝(なんぢ)の御(み)心(こころ)のならん(こと)を(愛(あい)する(ところ)に)

神は愛其物に非ざれど非理性的のものにありては、自愛の中に顯現し、理性的のものにありては、博愛の中に顯現す。(トルストイ語録)

人は神に透入することを必要とす。其處にのみ人はよく互に他の人と結び合ふ。(トルストイ語録)

神を愛するとは、彼の欲ふところを欲ふの義なり。(トルストイ語録)

愛するとは、我等が愛する者の欲ふところを欲ふの義なり。(トルストイ語録)

人は何處に生るるとも、其處に彼の全く知らざる個人の集まれるものありて、

彼の生活の法規を定む。(トルストイ語録)

人は、「彼自らが」彼の肉體に非らずして、むしろ彼の精心的存在なる事を知らざるべからず。(トルストイ語録)

人は其の生活に實證せざる限り、何物の善意をも知る事能はず。(トルストイ語録)

生くるといひ、死すると言ふも、一の小區分より次の小區分へ移るに過ぎず。(トルストイ語録)

父よ願はくは我を助けて、總ての謙讓と純潔と愛とに於て汝の律法を成就し、其の中に悦樂の絶えざる泉を見出させ給へ。(トルストイ語録)

予の知れる一切を予は知る。神あればなり。予は彼を知ればなり。(トルストイ語録)

人は唯だ彼の掌中に存するもの、——彼自らをのみ改善するを得む。(トルストイ語録)

苦惱にして發見せられ、了解せらるゝに至れば、即ち救濟せらるゝなり。(トルストイ語録)

人間は其の生命を奪はれざる限り、自由なきものとして、想像せらるるを得ず
(トルストイ語録)

新しく生れたる者の境遇は、一面喜悅の境遇にして、一面危險に充てるなり。(トルストイ語録)

哲

學

三

死は常に、世俗昌榮の屋宇が竣工するに前ちて到るべし。(トルストイ語録)

人あり、我れとは何物ぞと考察するとすれば、彼は屢々、我自身の内部に二種の異分子を含むことを覺るであらう。一方は盲目的肉體的、他は理解を爲し、靈的である。(酒と煙草)

一切の人間の生活と云ふものは、要するに次の二様の活動から成つてゐるのだ。(一)自分の行爲を良心と調和せしめようとする活動、若くは(二)従來の如き生活状態を繼續したいために、良心の命令を聞かないようにする活動である。(酒と煙草)

此の莫大なる魔酔物費消の原因は、之からして幸福、慰樂若しくは快愉を得る故ではない。唯單に人間が良心の聲を塞がうとする淺ましい望みからだ。(同)

肅然として我精神の醒めて居るとき、何人も賣春婦の許に赴くことを作ち、他人の所有物を盗むことを耻ぢ、兇器を揮ふことを作ぢる。(酒と煙草)

女の墮落は、半ば、飲酒の結果である。不潔の場所に赴く男は、大概は酒に酔うて居る。酒には良心の聲を抑へ付ける作用がある。世人は能く之れを知つてゐる。故に初めから心あつて酒を飲む。(酒と煙草)

喫烟は精神的労働を助けるとは、普通唱へらるゝ説である。單に精神的勞

言
働の排泄物、即ち思想の分量と云ふ點にのみ就いて言へば、此の説は確かに眞理である。(酒と煙草)

記憶せよ、人の全生涯に關係ある所の大切な業務は手足若くは背骨の力に依つて爲さるゝのではない、實に精神を役するに依つて爲さるるのである。(酒と煙草)

眞の生活は、大なる外的變動の現はれるところ、即ち我等がぐるゝ走り廻つたり、どんと衝突したり、命がけて闘かつたり、或は人を殺戮したりするやうなところに在るのではない。却つて彼の小さい、限りなく小さい無形の變化の起るところにのみ存するのである。(酒と煙草)

意識の世界に發生するところの至妙の變化が、想像にも及ばぬほど、洪大の意味ある重大事件を惹起するのだ。(酒と煙草)

人間にあつては、何よりも先きに意識の潔白、且つ明晰ならんことを要する。意識ほど人の全體をよく支配するものはないからだ。(酒と煙草)

自己を麻痺せしめることの甚しい人間は、其れだけ道徳的に動きのとれない不自由なものである。(酒と煙草)

道徳的、智力的の程度が低いと、人は甚だしく良心と實際生活との不

調和を感じない。(酒と煙草)

多くの人は、生涯を通じて自己を欺き、何時までも同一の、曾ては自分の是認した、不徹底にして、且つ矛盾のある、人生觀を抱いて、我精神の漸く明晰にならうとする毎に、二十年も前に衝突した障壁に向つて、又しても無益の突進を試みるのだ。けれども、彼等は此壁を貫き通すに大切な思想の利刃をば初めから故意に砕してかかるのである。故に到底、之を突抜いて前に進むことは出来ない。(酒と煙草)

効果のある思索をなさんがためには、先づ最初になすべき思索がなんであるか、そして其次には何を思索すべきか、それを知ることが必要である。(人生論)

人生は人間が探求せんとする水車である。水車はよく粉を作らんことを要求せられ、人生は善ならんがためにのみ必要である。(人生論)

人は唯より善くせんがためにのみ人生を研究する。智識の道程に人道を進めた人々の人生研究はそれである。(人生論)

生とは死に反抗する活動の總和である。生とは或る限られたる時間内に、或る有機的存在の中に次ぎ々に起つて來る現象の總和である。(人生論)

人間の心と心とを交通せしむる唯一の手段は言語である。そして此の交通

三
を可能ならしめる爲めには、凡ての人に共通した精確な觀念を間違ひなく呼び起させる言葉が用ゐられる必要がある。(人生論)

あらゆるものを説明せんがためには、ヘブライ人がメシヤを信するが如くに、絶對に科學の信條を信する必要がある。(人生論)

人はあらゆる生物が、彼自身と同様に、自己の小さい幸福のために、他人のより大きな幸福を奪ひ、その生命さへも奪はんとしてゐるのを見るのである。(人生論)

人が永く生きてゐれば居る程、いよいよ明かに解つて來るものは、倦怠と

飽滿と勞苦と苦痛とがいよいよ大きくなり、歡樂がいよいよ、小さくなると云ふことである。(人生論)

目の見えるものは、彼の前にあるものを理解して定める——盲人は杖で前の方を摸索する。そしてその杖に當つたものの外には何物も存在しないと斷定する。

(人生論)

富者に依つて得られる科學及び藝術の成果は、唯その倦怠と戦つて喜ばしい時間を過ごすことのためにのみ有用である。(人生論)

人間の生活は醒めてから眠る迄の間の行爲の連続である。人は絶えず行爲

の選擇を行はなければならぬ。(人生論)

時間及び空間に於ける人間の位置を考へる時に、人は先づ彼の兩面に無窮に續いて居る時の眞中に立つて居ることを知る。更に彼は何處にもあると同時に何處にもない、空間の中心に立つて居ることを知る。そして時間空間から離れた彼の此の自我を、彼は實際に知つてゐる。(人生論)

人間の現實な生活に於いて、動植物としての存在(有機的構成)と物質としての存在の二つの様式は、彼の仕事のための道具と材料とを供給するが、仕事そのものを與へるものではない。(人生論)

人間の現實な生活は、彼の意識の内に現れて居るものであり、動物我を理性の法則に従はせることであり、全く獨立した幸福に到達することである。(人生論)

狂氣、慟哭、亂醉に陥つてゐる場合、或は情慾の強く迸り出て居る場合の人間の活動が、如何に力強い敏速なものであつても、吾々はその人を生きて居る人と認めることが出来ない。また生きてゐる人間として彼に對することが出来ない。(人生論)

動物我を理性の法則に従はしめるものとしてより外に、人生を理解することとは出来ない。(人生論)

時間空間の條件は、眞實な人生に勢力を及ぼすことは出来ない。(人生論)

理性に從つて到達する善に對する憧憬の力は、向上の力であり、人生そのものの力であり、時間空間に依て制限されない力である。(人生論)

理性の生活は實在してゐる。實在して居るものは唯だ理性の生活丈げである。一分の時間の間隙だとか、五千年の時間の間隙だとか云ふものは、理性の生活では認められない。何故ならば理性の生活には時間は實在しないから。(人生論)

個人性の意識は人生そのものではない。しかし此處から最高の幸福への努力の生活が初まるのである。(人生論)

何よりも先づ個人性の目に見える目的が、生活の目的として現れて来る。これらの目的は目に見えるものであるから、解り易いものやうに考へられる。

(人生論)

人間の眞正な幸福が如何なるものであらうとも、動物我の幸福だけは棄てなければならぬ。(人生論)

「爾曹新に生れざるべからず」と基督が云つた。これは誰れかの命令ではない。

人間は必然に此處迄行かずに居られないのである。命を見んがためには智的意識の新生命に甦らすには居られないのである。(人生論)

讀たり聞いたりする議論の中にも、愛を以つて人生の規則正しい流れを掻き亂す不規程な或るもの——苦しい頭腦の一状態——となして居るものが少くない。それは太陽が昇つた時に、鼻が感じさうな或るものに似てゐる。(人生論)

人間が神である——と想像する——場合に於いてのみ、人間は或る特殊な人々を愛することが出来る。(人生論)

人間には唯一つの苦痛がある。此の苦痛は彼をして、有意的に無意味に、唯一

の幸福ある生活に没頭せしむるものである。(人生論)

全世界が了解せればならぬことは、無意識的養分の過程の止みたること、及び他の意識的過程の必要なることなり。(一日一訓)

眞理は努力より他の手段によりては、確められ能はず。(一日一訓)

人間生活は人々が、全き眞理を掴み能はざるよう攝理されたり。(一日一訓)

犠牲の哲學に向つての唯一の可能なる基礎は無上命令である。爾は爲さればならぬ。如何となればそれは正義なるが故に」との。(一日一訓)

眞の藝術家の目的は人間の安寧にあり。(一日一訓)

生の改良は内部的道徳的完成によりてのみ可能なり、然るに人間の總ての努力は外部的である。(一日一訓)

生の確乎たる目的を自覺せよ、さらば吾人は喜びを見出すことを得ん。(一日一訓)

結婚と性慾問題

彼の人達は、お互に愛してゐるか、お互に愛するようになることが出来るか、何も知らずに、行當りばつたり結婚して、一生お互に苦しみ通してゐる。(泥濘)

世間の人は愛のない二人を結婚させるのです、さうして二人の仲が旨く行かないと不思議がるのです。(泥濘)

持有主の勝手に番ひになるのは動物だけでございます。人間には好きも嗜好もありませんから。(泥濘)

大事な點は、唯愛ばかりが結婚を神聖にするもので、本當の結婚とは唯愛に仍

つて神聖にされる結婚ばかりだと云ふことなのです。(泥濘)

人間の間にはまだ愛と名けられる感情が一月や年に限られずに一生を押し通す感情が存在してゐはしないですか。(泥濘)

放蕩の要點は肉體的の何かにあるのではない、——肉體的の亂暴はまだまだ放蕩とは云はれません——放蕩は本當に放蕩の名に傾する事實は、肉體上の交りを結んだ女と一切の道德的關係に立つことを避ける處に成立するのです。(泥濘)

墮落した男といふ言葉は、モルヒネ中毒に似た、酒客に似た、喫煙家に似た、

一種生理状態を表してゐるのです。(泥濘)

美は善だといふ妄想の根の深さです。美しい女が馬鹿なことを饒舌つても、私達は其の聲を傾聴するだけでその馬鹿を聞きません、甚だしきは其の中から聰明の響を聞き出します。女が話をする、女が醜い事をする、——さうして私達は其の中に優美を認めるのです。(泥濘)

女達は、最も崇高な、又最も詩的な愛も、其の基くところは道徳上の優越ではなくて、肉體上の接近や、それから髪結び振り、顔色、着物の仕立などにあることを熟知してゐます。(泥濘)

女が自分を男の肉慾をそのかす機械にすることが甚しいので、男は靜かな心持で女と交際することが出来ません。男は唯女の傍に近寄つただけで、直に女のまやかに罹り自分と思慮が上つたりになつてしまふのです。(泥濘)

肉體的戀愛は安全瓣である。若し現に生きてゐる人類のゼネレーションが目標に到達しないとすれば、それは彼等が妄執を、妄執中の最も強い者なる性慾を持つてゐるからだ。さうして性慾がある限りは、其處に新しい種族がある、従つて又新しいゼネレーションに於いて目標に到達すべき可能性がある。(泥濘)



戀愛は肉體的快樂の満足とともに消滅す。(泥濘)

静かに
静かに
静かに

結婚は常に幸福でないのみならず寧ろ厄介だといふことを、私の靈魂の奥底まで感じてゐます。(泥濘)

さうして彼がこの愛の——換言すれば豚生活の名に於いて破滅に導くものは一體誰ですか。人類の半数です。一切の女をば——人類を眞理と幸福とに導き高むべき事業に於いて、彼の補助者とならなければならぬものをば、——彼の享樂のために、補助者ではなしに、敵としてしまふのです。到る處に、人類の進歩を障礙するものは誰ですか。女です。(泥濘)

子供と共に棲む生活の全體が、私の妻にとつて——従つて私にとつて——喜びではなくて苦惱でした。(泥濘)

子供があるといふことは、私共の生活を改良するための寸效もなく、唯一層それに毒を注いだと云ふに過ぎませんでした。その上子供は私共にとつて唯不和の新しい口實となるばかりでした。(泥濘)

労働者は假令子供を養ふのが難儀でも、猶それを欲しがります。彼はそれを欲しがるから、そのためにその結婚生活も道義的根據を得る譯なのです。(泥濘)

妻が死ぬか、二人が離婚するかすれば、私は自由になるのだ——私はどうしてそれを實現すべきかを考慮する。私は自分の考へが曖昧になることを——考へなければならぬ事について考へてゐない事を、發見する。さうして考へなければな

らない事に就いて考へてゐない事のために、私は煙草の煙を空に吐き出す。(泥濘)

あらゆる憤怒に際して何時も経験する通り、最大主要の感情は自己自身に對する憐憫でした。(泥濘)

嫉妬する者にとつての——(さうして私達の社會に於ては一切の人間が嫉妬深いのです)——最大の苦惱は、人間社會に於ける公認の交際形式が、男女間の最も大きい、最も危険な接近を許してゐる點にあります。(泥濘)

苦惱の最も堪らないのは、一體妻を愛していいのが憎んでいいのか、其の點に關する不確實でした。疑惑でした、不安定でした。此苦惱があまり激しいので

——私は今も尙ほ覺えてゐる——私は、線路の上に乗出して、列車の下に、軌道の上を身を投込むで、それでおしまひにしてやらうかと思ふ誘惑が、非常な根強さで私の心に持上つて來る事を感じました。さうすれば、少なくとも此後の疑惑はなしにすむのだ。私を妨げてさうさせなかつた一つの理由は、妻に對する憎悪の直接の原因となつてゐる、私自身に對する憐憫でした。(泥濘)

私は彼女の面相の中に、唯だ恐怖と、私に對する憎悪とばかりを讀むたのでした。それは、他人に對する戀愛が必然に喚起せずにはゐない筈の、あの恐怖と、あの憎悪とでした。(泥濘)

架空に構想されたる男女の要求を満足させるために、肉體的にも精神的にも壞

滅せすにはあられぬやうな、女性の大階級を拵へ上げてゐる。さうして、未婚の男子は申分なく平靜な良心を以て、放蕩のためにその身を委れてゐる。(泥濘)

假令如何なる假想科學によつて支持されてゐようとも、不道德な教説をば信じてはならない。(泥濘)

男性と女性とは、結婚前も結婚後も等しく、戀愛と之れに結合する肉體的愛情とを、今日彼等がやつてゐるやうに、詩的な、崇高な、状態と觀するこゝとをやめて、人類を低下せしむる動物的状態と觀するやうに、家庭に於いても輿論によつても教育されなければならぬ。(泥濘)

夫婦間に於ける貞實の誓約に背犯することは、金錢的義務の背犯や、商務關係に於ける詐欺を罰すると、少なくとも同程度に輿論によつて罰せられなければならぬ。(泥濘)

無結婚の状態に於いて、人間の威嚴を示めず不可缺條件となつてゐる貞潔が、結婚生活に於いては益々重大な義務となるといふことを、理解しなければならぬ。(泥濘)

基督教徒の理想は隣人及び神に對する愛である。神と隣人とに奉仕するため自己を虚くすることである。肉體的愛情は、結婚は、自己に奉仕すること

である。従つてそれは如何なる場合にも神及び人に對する奉仕の障礙である、(泥

五四

濁) 唯理想として純潔のみを建てよ。任意の男子が任意の女子と共にする一切の墮落を、唯一なる、全生涯を通じて解く可からざる結婚なりと思惟せよ。(泥

濁) 前にやつて來た春の憂愁——未來に對する願望と希望の代りに、現在に於ける幸福の感情が私の總身を慄はせました。(結婚の幸福)

僧が「神の祝福汝等の上にあれ！」といふ時には、私は何時でも、恰もこ

の言葉と共に光と熱とが私の心臓に押し入るかのやうな、肉體的な快さの感情を覚えるのでした。(結婚の幸福)

特別な家族間で、男が女を娘のやうに可愛がるやうな運命になり、そして女を何時か、この他の意味で愛するやうになるとはまるで思も寄らぬことである。(結婚の幸福)

僕は願ひと望みとに我を忘れて、幾晩もまんじりともせず明かしたものだ。あれは懐しい夜であつた。……併しあの時分には、凡てのことがまだみんな僕の前にあつた。今は凡てのことが、みんな僕の背後に横つてゐる。今僕は現にあるもので満足してゐる。さうして僕は、それで大變幸福を感じる。(結婚の

五五

幸福)

ぢやアよろしい—お前は僕に犠牲を捧げて呉れる。それから僕も亦お前に、お前の更に望むものは何だい？寛容の競争だ。これより大きい結婚の幸福があらうか。(結婚の幸福)

竟り兄との友誼上、自づと大人が子供に對する様にやつてきた自分の態度が、層一層戀の妨げとなつて居るやうに思はれた。(アンナ・カレニナ)

自分は醜男な人の好い友達位に思はれるだけは出来るかも知れぬが、併し此方が思つてる程の熱い思ひを、先方からも寄せて貰ふと云ふには、何うしても容

貌のよい、地位の高い人間でなくては駄目だ、彼はこんな風にも思つた。(アンナ・カレニナ)

成程彼とても、女は時々醜い、充らぬ男と戀に陥る事のあるものだ位は聞いて居た。けれども丁度美しくもなく、立派でもなく、詩的でもない女を戀する事が出来ぬと同じく、そんな事は到底信を置くに足る事ではないと思ひ決めたのだ。(アンナ・カレニナ)

動物としての人の起源だとか、反動作用だとか、生物學だとか、社會學だとか言ふ事に關するこれら科學上の問題を、最近に至つて愈々繁々自分の心を動かす様になつたところの、生死の意義と言ふやうな痛切な問題と、關係さ

せて考へるなどと言ふ事は夢にも思ひ付かなかつたのだ。(アンナ・カレニナ)

人間の存在の自覚は凡ての感覚の結合から得たものだ、竟り存在意識は、感覚の結果だと言ふのです。(アンナ・カレニナ)

駿馬を知るはその烙痕にあり、戀する若人を知るはその眼なり。(アンナ・カレニナ)

僕は自分の生涯を嫌悪の眼で見ると、ぞつとして自分を呪ひ、且つ悔いないでは居られないんだ。眞實だよ。(アンナ・カレニナ)

彼女は殆ど息塞るやうな氣がして、顔を上げる事も出来なかつた。唯最ううつとりとして了つた。嬉れしさの思ひが心に充ち溢れて居る。戀を打明けられると言ふ事が、斯う迄強く心を動かすものだとは、今の今まで夢にも知らなかつたのだ。(アンナ・カレニナ)

互に一言も口を利かずに居て、僅かに眼の表情と、言葉の情趣との形のなことはなか、互の胸を了解し合ふなんて、何と言ふ素晴らしい事だ。(アンナ・カレニナ)

キッティーはアンナを何處までも素直な眞面目な女だと思つた。が、それと同時に、アンナには何處か、自分等の分らぬやうな錯綜んだ詩的な味に充ちた世界

があると言ふ事を思はぬ譯には行かなかつた。(アンナ・カレニナ)

舞踏會全體、世界全體、有りとあらゆる事物が、凡てキッティの心で、霜の底に消え去つた。唯彼女の嚴重な教育の力だけが、辛うじて彼女の心を落着かせて、何處迄も自分の義務を果させた。(アンナ・カレニナ)

一番幸福な結婚は思慮から出た結婚だと思ひます。(アンナ・カレニナ)

私達の言ふ理性の結婚と言ふのは、双方共放埒の味を嘗めた上での結婚を言ふのです。(アンナ・カレニナ)

夫に愛なんて云ふ事が解るかしら。夫が私を愛するなんて言ふ事があり得ようか。若し愛と言ふ言葉を聞かなかつたとしたら然う云ふ言葉があると言ふ事すら何時までも知りはしなかつたのだらうに。(アンナ・カレニナ)

精神上の裸體を恥づる心の爲めに、女は惱み、男は苦しむ。けれども殺人者がその犠牲者の骸の前で恐怖を感じながらも、其の犯非を巧みに了了さんが爲めには、死骸をすたすたに切り裂いて埋めて了はねばならなかつた。即ち自己の爲した殺人によつて得たるものを利用するの外はなかつた。
男の方を遠くから見居る女の子は、そして何事も信じて了ふ女の子は、自分には何と言つて好いか分らぬ感情を持つ事があるものですし又往々持つてるもので御座いますよ。(アンナ・カレニナ)

簡易と勞苦の生活がどれ程よいからと言つて、俺はそれに戻つて行くことは出来ない。俺は彼の女を戀してゐるのだ。(アンナ・カレニナ)

彼女は戀を彼に與へた尊ぶべき女であつた。そして彼は又彼女を戀してゐた。随つて彼の眼には彼女は法律の認めた妻と同等の、否其れ以上に正當に尊敬さるべき所のある女であつた。自分が言葉で或は暗示で彼女を輕んずるか、若くは女が男に對して求める事の出来る充分の尊敬を缺きでもする事があれば、彼は自分の手を斷つて了つたであらう。(アンナ・カレニナ)

女と言ふものは男の立身が一番眼をさせるものだ。女を戀して居て同時に何か仕事をすると云ふ事は困かしいものだ。が妨げにならずに都合よく戀すると

言ふ方法が只一つある、——其は結婚だ。(アンナ・カレニナ)

女は凡て男より實利的だ。吾々は戀と事ふ事から何か非常に偉大なものを作る。が彼等は常に墮落又墮落だ。(アンナ・カレニナ)

俺は働くと、俺は何事かしたいと思つてゐる、併し其は凡て終りを持たねばならぬものだと言ふ事を忘れてゐた。俺は——死と云ふ事を忘れてゐた。(アンナ・カレニナ)

彼女は女が其の身にとつて戀と言ふものが一生の如何なよい事よりも優つてゐると言ふ場合に戀する事の出来る、其の様に彼を戀してゐたのだ。(アンナ・

義務は権利即ち権力、金、名譽と言ふ様なものと結び付いたものです。婦人の求めてゐるのも然ういふものです。(アンナ・カレニナ)

徐に既住を憶起すとツイ昨日今日の出来事の様には思はれ、青春の活々とした新しい空氣が身の廻りに吹いて來ると、思はず悄然と戦慄いた。(復活)

人生の快樂を組成するは唯此信仰の一義で、之れを詩的生活とも美的生活とも云ふ。(復活)

結婚は夫婦双方が同一の目的を有する時のみ幸福を齎す。(一日一訓)

結婚は先づ自己生存の意義を思はざるべからず。(一日一訓)

夫婦の紛紜は謙遜によりてのみ解決せらる。(一日一訓)

性的關係は次第に新形式に趣きつゝあり、古きものは次第にすたる。(一日一訓)

單に人生を楽しもうと欲して結婚するも決して成功せざるべし。(一日一訓)

女が彼女の幼兒に對する愛は利己的ではない、仕事師が仕事を手にして居る時

仕事に對する愛だ。(一日一訓)

結婚者は先づ自己生存の意義を思はざるべからず。(一日一訓)

女はより強くなつて、男を支配す、是れ蓋し男には其の務を破りたるに、女子は之れを充足したればなり。(一日一訓)

女は人種の繼續に獨占的に使命を有す、蓋し彼等にのみ適すればなり。(一日一訓)

肉に死するは靈に生くるの基。(一日一訓)

若し人が動物的平面にあらば、食たり、仕事したり、書いたりする平面、さらば「戀にあること」は彼に向つては向上であるであらう。(一日一訓)

私は昨夜妻に對して一人の夫でした。けれども其は決してあの靈肉の奮闘を打ちやつて仕舞と云ふ理けぢやありません。あゝ何うかもう二度とし度くないもんです。(トルストイと其諸問願)

夫が妻に禮を守れといふ條件だけで、夫の名譽を保護するといふ尊い義務を與へ、其他の一切の自由を與へてやつてゐる事をお前は殘忍と云ふのだな。(アンナ・カレニナ)

彼は出産が近いてゐた。屹度出産だ。だが何う云ふつもりなのだらう？
生れた子を正當の子として、私との仲を元に直しそして離婚されるのを防がう
とするたくみかな？（アンナ・カレニナ）

彼女自身の特權なる避くべからざる法を充す女は、決して男子の勞働を領
有する權利を要求せざるべし。（一日一訓）

神や人に奉仕する一般の使命に於いて、男子と女子とは全然相等し。（一日一訓）

男女の義務の相違の根據は穴勝人工的にあらずして生理的なり。（一日一訓）

二

人工的に子供を無し、彼女の肩や捲毛によつて男を魅する女は、男を支配す
る女にあらず、却つて男に依つて腐敗せしめられ、男の支配に歸したる女なり。

（一日一訓）

汝の生の目的は結婚生活なるべし、結婚生活の喜びたるべからず、然
り汝の生によりて多くの眞理と愛とを導くことなるべし。（一日一訓）

人はその全存在を擧げて精神的に意氣を發揚して居る時程自尊家であること
はない。（コサツク）

俺は戀をして居る！非常にこがれてゐる！あつげれな人々よ！それはいいことだ。(コサツク)

コサツクは女を幸福を致す道具と見る。結婚して居ない間は、大さわぎをしても結構となつてゐる。然し一旦妻となると、若い道具を打捨て、夫の幸福のため死ねまで働かなくてはならない。彼が妻に従順労働を求めるところは全然東洋的である。(コサツク)

汝の精神に愛と同情との琴線が尙ほ弛んでゐぬならば、琴線に觸れる響は女中部屋に於て最もよく聴くことが出来る。(生ひ立ちの記)

これも覺えておいて可い。女て奴は、砂糖のやうに甘い奴だ。それが可愛い。だが餘り深入りすると往生だて。(闇の力)

どうも女と云ふ者は當にならん者だ。第一女は誰に何かを習ふんだ。唯酔つ拂ひの百姓なんか、よく蹄係を掛けちやをかきなことを仕込むんだ。女の教育たあ唯それ丈だ。女に眞剣に責任を持つてやらうつて者あ誰だか俺のにや分れない。新兵にや長官とか隊長とか云ふ者が責任を持つてするが、女にやその責任の持ち人がありやしれえ。丸で番人のついて居れえ畜生のやうなもんだ。其癖唯々で圖々しい性分だ。どうも女ぐらゐ下等なものば有りやしれえ。空樽だつてこれまでだ。(闇の力)

屹度皆で醜い罪なことをやらがしてゐるんだ。罰あたりども奴！何でも不吉な災難はいつでも斯う云ふ女どもが本だ。男性だつて讀めたもんぢやれえが、女どもと來たら——丸で野獸だ。何だつて怖がりやしれえ。(闇の力)

私は貴女の忠實な奴隷です、ですから、貴女にだけは打明けてお話が能きますがね。私の子供等は私の存在の障礙物ですなあ。此れが私の十字架ですわい。(戦争と平和)

結婚の義務に於いて爾を試みるものが神の意であるといふなら、爾は彼の意に協ふやうに用意するが宜い。(戦争と平和)

戀に燃立つ青春を過ぎてゐる人の結婚は兎角に躊躇勝ちである。(復活)

一般に結婚の利益と云つたら、第一に家庭を暖かならしむると共に不規律な獨身生活を道徳的ならしむる、加之ならず早晩かは小兒といふ可愛らしい奴が出来て、今迄の空々寂々の生活に新しい楽しい意味を與へる。(復活)

結婚は青春を過ぎ去つた獨身者に何よりな從來の氣隨氣儘の自由を失つて、女といふ奇妙な動物に一日束縛されねばならない。(復活)

君は結婚の中に、見知らぬ人が君に豫約したものを發見したのか？。(光の中に歩め)

君たちが否定するのは、若し結婚でないとすれば、愛だ。(光の中に歩め)

欲情は悪いものとして観られてゐるのではないが(神は一つも悪いものをおつくりにならなかつた)、それは善いものだが、併し必要な限界の中に保たれなければ悪となり得るものとして観られてゐるのだ。(光の中に歩め)

結婚するといふ點にある。基督教の結婚は、ただ、人が自分の同胞人類に對して愛を感じる時に、さうして肉體的戀愛の對象が、あらかじめ、人間に對する人間の同胞的愛情の對象であつた時に——ただその時にのみ出來得るのだ。(光の中に歩め)

肉體的戀愛は、ただ、其の基礎として人間の人間に對する尊敬や愛を持つてゐる時にのみ、はじめて正しく、理性的に、確かな根柢を持つものとなるのだ。(光の中に歩め)

一體基督信者は彼と或る一人の女との結合が、他の一人にも苦痛を與へないと知つてゐる時にのみ、はじめて結婚する。(光の中に歩め)

人間は實際動物的存在だ。併し人間的存在でもある。(光の中に歩め)

動物的本性が理性に仕へるものとなるならば、そのときにこそ、さうして

その時にのみ彼は優れた幸福に到達するのだ。(光の中に歩め)

愛情は愚劣なるを得ず。(トルストイ語録)

淫欲の襲来は思想の混乱を致す、寧ろ思想の缺陷を歸すなり。(トルストイ語録)

汝若し婦人を目するに歡樂の目的物を以てせば、そが汝の妻女なる場合に於て特に言ふ。汝は姦淫を犯すなり。(トルストイ語録)

人生の背理なるは、婦人の權力を揮ふによりて生ず。婦人の權力を揮ふは、男子の節欲をなさざるによりて生ず。即ち背理の人生は、節欲をなさざる男子の

責任なり。(トルストイ語録)

動物としての人間は、闘争の法則に従ひ、種族を繁殖する爲めに性的本能に従ふ。(トルストイ語録)

人類の最も重要な目的の一つは、貞潔なる婦人を教育するにあり。(トルストイ語録)

若し性交にして一定の條件(結婚)の下に許さるべくば、貞潔は即ち貞潔にあらざるなり。(トルストイ語録)

藝術觀

結婚けつこんはよしそが、人類じんるいを永續えいぞくせしむる爲ためになされむとも、神かみのため、人ひとの爲ために盡つくすを助たすくることなかるべし。(トルストイ語録)

藝術價値の評定は、世人が人生の意義に關してなす處の觀念に繫り又世人が現生に於て善良若くは邪惡なりとし思惟する處のものに據る。(藝術論)

現代に吾人の有する藝術は唯一の實物たる事を吾人は明言す。(藝術論)

人類の三分二は遂に此唯一無二の藝術に推測するに及ばずして生死す。加之我基督教社會に於てすら、能く之が用を爲さむものは百人中一人あること稀なり。他の九十九人は代々勤勞に忙殺せられて我藝術を玩賞するの餘暇なく、よし之を玩味せんとしても難解不明の我藝術に對しては究極その味の何たるを知らずして死亡する也。(藝術論)

總ての藝術的作品に於ける主題の價値は一に其の斬新なるに存す。(藝術論)

或藝術的作品は善良なり、然るに其の大多數者に了解せられずとの事と言ふは恰も或食物に就て、こは善良なり、されど人々の大部分は之を食ふ事を控へざるべからずと、人の云はんが如し。(藝術論)

惡化したる藝術は大多數人に歡ばれずして可なりと雖も、只夫れ善良なる藝術に至りては、必ずや世人一般に歡迎せらるるものたらざるべからざる也。(藝術論)

茲に一事物のあるあり、吾人は心中既に之を知悉すと雖も、而も之を名狀すべ

き言辭を見出す能はず、一旦藝術の之を表示するに遇ふや、茲に初めて炯然自得するもの之ぞ即ち眞箇藝術的印象を會得せる人の所感とはなすなれ。
(藝術論)

藝術を指して、詩的たり、其の一藝術的作品に類似するを以つて善良なりと言ふは、恰も一片の鉛に就きて、其の銀の一片に肖似するが故に善良なりと言はんが如し。(藝術論)

藝術の目的は、藝術家に依りて感嘗されたる感情を吾人に感嘗せしむるにあり。(藝術論)

世界的藝術は必ずや確固不拔なる内面的標徴、即ち宗教的概念を有す。
(藝術論)

藝術はもと藝術家によりて感嘗されたる個人的感情の他人への傳達なり。
(藝術論)

普及の程度愈々強大なるものは、益々藝術の眞なるもの也、若し夫れ其藝術の内容即ち其の藝術が吾人に傳達する感情の價値の如きは素より問ふ所にあらざる也。(藝術論)

畫幅を購求し音楽家を奨励し、文學者に衣食せしむる其の嗜好者より此等

の藝術を奪取せよ、彼等は最早其人生を迎り行くの狀態を失ひて、悲哀と倦怠との爲めに悉く死滅すべけんのみ、即ち知るべし其の生活狀態の悉く不條理且つ不道德なる事を。(藝術論)

藝術は職業に非らず、藝術はこれ其藝術家によりて感受されたる感情を他人に傳達するものの謂たり。(藝術論)

あらゆる物質的需用の満足は藝術家に保障するが如きは、却つてこれ藝術を生産するの能力に妨害を與ふるものと謂はざるべからず。(藝術論)

夫れ藝術は歡樂に非らず快樂にあらず、又娛樂にもあらで實に一大要事也。

(藝術論)

眞藝術、基督教藝術の任務は現今人類の同胞的結合を實現すべき事也。(藝術論)

眞の藝術家の目的は人間の安寧にあり。(一日一訓)

古き藝術は新しき藝術のために、古き科學は新しき科學のために皆な轉覆せらる、彼等は平易なる常識にも得耐へざるなり。(一日一訓)

苦痛と自己犠牲とは常に眞の思想家及び藝術家の圖たるべし。(一日一訓)

藝術の職業化は、偽藝術の蔓延を致したる第一條件なり。(トルストイ語録)

大なる藝術品は、一にそが何人にも近づき得べく、解し得べきが故に大なるのみ。(トルストイ語録)

詩的なりと云ふは、——借りものの義なり。(トルストイ語録)

藝術の任務は、今日に於いてただ少數の人々のみ到達し得たる、四海同胞の感情を各人の常習となし、本能となさむとするにあり。(トルストイ語録)

藝術は遊興にあらず、安慰にあらず、娛樂にあらず、藝術は大なる事件なり。

リ。(トルストイ語録)

藝術家にして詩人なる予は、予の知らざりしものを書き且つ教へたりき。(トルストイ語録)

藝術の爲めに藝術を言はば、我等を樂ます所の一切の事物に關與するもの——藝術なり。(トルストイ語録)

學問と藝術とは、肺臓と心臓との如く相助く。二者其の一を損すれば、他も亦安き事を得ざる也。(トルストイ語録)

○ 將來の藝術家は、何等かの勞作によりて自ら支へ尋常人の生活を送るべし。

○ 眞藝術の作品が人生に新しき感情を導き入るるは、妻女の愛が新らしき人間を生み出づるに異ならず。(トルストイ語録)

○ 總ての藝術は、眞の藝術も偽の藝術も、極めて僅かなるものを例外として、種々なる形式に戀愛を記述し、描寫し、また挑發するの用に供せらる。(トルストイ語録)

○ 暫く題材を度外に附する時、個性と、明晰と、誠實と、此の三つの者の程度によりて、藝術としての藝術品の價値は定めらる。(トルストイ語録)

○ 藝術は談話とひとしく、消息交通の手段なり、隨つて進歩なり、換言すれば、完全に到達せむとする人類の努力の手段なり。(トルストイ語録)

○ シエクスピヤの作品は、總ての藝術の要求を充さず。加之、其の傾向は低劣を極め、反道徳を極めたり。(トルストイ語録)

○ 藝術家の製作は説明せらるることを得ず。(トルストイ語録)

○ 観客或は聽衆にして、作者の感じたる感情によりて感染せらるることあらば、即ちそれは藝術なり。(トルストイ語録)

眞藝術の無かりし結果は偽藝術にはぐくまれたる階級の腐敗に於て現れざるを得ざりき。(トルストイ語録)

普遍的の藝術はただ、或る人々が強き感情を経験して、これを他人に傳達するの必要たるを思ふとき生ずるなり。(トルストイ語録)

藝術家にして若し、鮮血滴るが如き傷口を巧みに描き出でたらむには、見る者の感動すべきこと疑を容れず。されど此の如きは藝術には非ざるべし。(トルストイ語録)

シエクスピヤが何物にてありしをも妨げず。ただ彼は藝術家に非らざりしなり。(トルストイ語録)

シエクスピヤに於ては一切のもの誇張せられたり。(トルストイ語録)

實際の二枚の葉は、嚴密に同様なること能はざれど、人工の二枚の葉はよく同様なるを得べきなり。藝術品の場合も亦然り。(トルストイ語録)

藝術家たるの道を教授するの不可能なるは、學校に於て宗教家を養成するの不可能なると選ぶ所なし。(トルストイ語録)

内容たるべき感情の貧弱なるにより、近代人の手になれるメロデイイは、驚くべく空虚なり無意義なり。(トルストイ語録)

ワグネルの樂劇は偽藝術の標本なり。(トルストイ語録)

ひと人をして藝術に似たものに習熟せしむるは、やがて彼等をして眞藝術の理解に遠からしむる也。(トルストイ語録)

眞藝術品は享樂する者の意識に於て、彼自らと藝術との間なる、並びにまた、彼自らと同一の作品を鑑賞する人々との間なる一切の障壁を撤廢す。(トルストイ語録)

勞働觀 ●

善き仕事とは人間社会と愛を増す仕事の謂なり。(一日一訓)

労働は承認されざるべからず。厭ふべきこととしてではなく、却つて生の喜ばしき業務として。(一日一訓)

我が労働のよく多く果實のとなりし時に、我は喜んで我が夢想せし單純生活に近づくことを得。(一日一訓)

最も悪しき、最も賤しき罪——労働者は殆ど其の様な罪に陥入ることがない——とも謂ふべきは、何人にも無用であるといふことであらう。(一日一訓)

肉體的労働をすることならば誰も田舎を擇ぶべし、田舎に於ては労働は最も健康的生産的なり。(一日一訓)

肉體的労働は余の實驗せる所によりて見るも、何等心的活動を害せざるのみならず、之を改良して又之を刺戟す。(一日一訓)

我れ肉體労働に、より堅く働けば働くほど、より健全に、より親しく我が身なるを感ず。(一日一訓)

労働的生活の理想の代りに、人々は不盡の財布の理想を創造した。(一日一訓)

ひとが若し眞に心的勞作によりて、他に事ふるよう命ぜらるるならば、彼等は此の勞働を完成することを耐へざるべからず、何となれば、靈的果實が生産せらるることは唯苦しみによりてのみなればなり。(一日一訓)

人々の勞働の生産は今日曾てよりもより多く超過す、而も是れ勞働者の群が非勞働者に與ふるものなるぞ。(一日一訓)

貧の原因は富者にあり。(一日一訓)

貧しき者は決して承認しなかつた、又決してせぬであらう、一の人々が常に閑散

であり、又他が絶えず働きのつゝあるが正當だとは。(一日一訓)

大なる恩惠的の運動は人民の生血を吸ふ寄生虫によつては爲されぬ、されど宗教的の人民によりて——然り眞面目なる單純なる勞働的の人民に依りてなさる。

(一日一訓)

富者は貧者を助くべく、何にてもなすべし。(一日一訓)

其處に我等の中に勞働的の生活は閑散なるものより、より多く尊敬すべきものなりと確信し、爾く此の確信によりて生活しつつあるものありや。(一日一訓)

資本家は獨占す。(一日一訓)

労働者は彼等の壓迫と攻圍とより彼等を自由にする爲めに、彼等の兄弟の一般の條件を重らす總てを禁する宗教的感情を彼等自身に教育せねばならぬ。(一日一訓)

労働者に他よりも安價に或る品物を生産することによりて彼の地位を改善するの可能を與へよ、假令それは彼の仲間の數千を零落するとは云へ、千の中の九百九十九は猶豫なしにそれをなすであらう。(一日一訓)

労働者は單に富者を助くるに難解たるべきや。(一日一訓)

總ての麵麩、全世界の總の善、人々がよりて以つて生き、且つ富む總ての者、總て労働者によりて作られる。されど彼が作るところのものによりて利益を得るものは彼ではない。(一日一訓)

戰爭論

戦争は又もや起れり、何人にも無用無益なる疾苦此に再びし、譎詐此に再びし、而して人類一般の愚妄殘忍亦此に再びす。(日露戦争論)

自家は戦争の危険を冒す事なくして、徒に他を煽揚するに力め、其の不幸蒙味なる同胞兄弟を戰場に送遣するに忍び得る乎。(日露戦争論)

彼の戦争の準備の爲めに、人間労働の結果たる數十億留の財貨が、無意味無目的に濫費せらるるのみならず、更に戦時に於ては、數百萬の壯丁が其の生涯中最も生産的労働に適せる時期に於て無残に殺戮せらるるものなることは識者之を知らざる筈なし。(日露戦争論)

人は我之を爲さざるべからすと云ふ、されど神は全く異りたる何事かを爲さざるべからすと云ふ、故に我は國家の元首として、強制の行爲、租税の賦課、處刑及隣人を殺戮する戦争を命令せざるべからすと説かるるも、我は之を爲すを望まず、又之を爲す事能はず。人を殺さざるべからすと教へられたる兵士、戦争の準備を爲すを以つて其職務と爲せる大臣、及び戦争を煽動せる新聞記者、其の他何人にて「我は何者ぞや」「我が人生に於ける到着地は何ぞや」と自問したる者は、必ず亦右の如く自答せざるを得ざるべし。斯くて國家の元首は戦争を宣言するを止め、兵士は戦闘する事を止め、大臣は戦争の方法を準備するを止め、新聞記者は之を煽動するを止むるに至らば、何等の新しき制度、施設、権力平均、裁判等を用ひずして、戦争のみならず其の他一切の災害に關し、今人の自ら陥れる此の絶望の現状を破却するを得べし。(日露戦争論)

敬虔なる人物の活動が高尚尊貴なる所以は實に此に有り、然り如此にして彼等の生活が利益によらず、唯だ宗教的自覺によりて指導せらるるに至りて、人類は初めて困厄より救はるるを得ん。(日露戦争論)

「然れ共敵若し來つて我を襲はば如何」汝の敵を愛せよ、然らば汝は一人の敵も持たざるべし」とは基督が十二使徒に教へたる言葉にあらずや、此の答は決して只の言葉にあらず、世人免もすれば敵に對して愛を説くを以つて過實の言と爲し、其の眞意は言葉の表面にあらずして、他に有りと思ふ者あれど、此答は實に的確明白なる行爲と其の結果とを指示する者なり。(日露戦争論)

我々にして若し眞に我々の敵を愛せしならば、若し眞に日本人を愛しはじむるならば、我々は一個の敵も有せざるべし。(日露戦争論)

我等の時代に於ける大争闘は、今日の日露間のそれにもあらず、地雷、爆彈、銃丸に依つて行はるるそれにもあらず、實に精神的争闘なり、而して此争闘や現に天啓を期待せる人類の明達なる自覺と、一般人類を圍繞し壓迫せる黑暗及び負擔との間に、間斷なく行れつゝあるもの也。(日露戦争論)

天然描寫

教會堂からは、鐘の音が運び傳へられて、それが眠むつた市街の上に廣がつて行くと、自から朝の近づくことが知れる。(コサツク)

街道は寂寞を極めて居る。偶夜馬車が雪と砂とを分けて狭い車道を駛つて行く。(コサツク)

すべてあたりは暗く寂しく悼ましかつた。彼の心は、追憶に充ち、戀に、悔恨に、楽しい壓付けられるやうな涙に充ちて居た。(コサツク)

彼は次ぎのやうな問題に就いて當惑して居たのである、一體何處で——藝術にしろ科學にしろ、また戀愛にしろ實地の活動にしろ——生涯一度しか人間には持

てない青年の精力の凡てを働かせたらいいのだらう——理智、感情、空想の精力といふよりは、むしろ肉體上の自發の力、一度失はれては又と歸らぬその力、人間に唯の一度丈け與へられて、いかなるところなり、その望むところ至善と思ふところに彼を仕上げ、この全世界を彼の心の欲するままにすると云ふ徳である。(コサツク)

彼は春に會つたのだ、そしてそれは、よろこばしい驚きとしてオレーニンに來たのである。(コサツク)

彼には山も雲も全然同じやうで、これまでに聽いて居た雪を載く山々の獨特の美しさは、バツハの音樂のやうに、また自ら信しない婦人に對する戀のやうに、

空想のつくりものであるやうに思はれた、で、彼は山に對する憧憬の念を棄ててしまつた。(コサツク)

そして彼が、自分と、山と空との距離をすつかり呑み込み、山の莊嚴な姿を解した時、そしてその美の無限を悟つたとき、彼は幻想ではないか、夢ではないかと打驚いた。(コサツク)

そこへ馬上のコサツクが二騎現れて来る。銃は釣合よく背にかけられ、鳶色と灰色の脚を交へながら馬の駆けるにつれ、騎手は揺れて動く、然しあの山は。(同)

テレク川の彼方には、どある村里から烟が立ち昇るやうである、然しかの山々

は……………(コサツク)

日は高く昇つて、葦を分けてうねり流れる河の上に照り輝く、然し彼の山々は……………(コサツク)

コサツクと山人とを相分つてテレク河は、濁流渾々として走つて居るが、なほ廣い静かな流れともなつて、葦の生えた低い右岩に灰色の泥濘を堆積し、百年にもなる樫の縫れ合つた根や、腐つた大楓の木、灌木などのある、険はしいが高くもあらぬ左岸を潜掘して居る。(コサツク)

いよ／＼黄昏が近くと、人々はお互に怖れあつて、己れの住家に急ぎ歸へる、

そして野獸や猛禽のみがあとに残つて、自由に荒蕩な地を掠めるのであつた。
(コサツク)

いづれの煙突からも牛糞を焼く刺戟性の煙が立ち昇つて居る。どこの廣庭にも
夜の静けさに先立つ騒しさが増して行くやうである。(コサツク)

若い娘が火をかまつてゐる間に、老いた女はまた門口へ出て行く。黄昏はひし
と村里の上に落ちかかつた。空氣は野菜や家畜や、糞の刺すやうな煙に充たされ
た。(コサツク)

太陽は雪を戴く山々の頂に近づく、嶺は羽毛のやうな雲の下から、白く輝い

て、雲は脚下の谿谷にまろび落ちるまま、どん／＼と暗い影をつける(コサツク)

夜の大部分は過ぎ去つた。西の方へ通り過ぎた黒雲は、その破れた縁の上に明
るい星の空をあらはし山の上には金色の月の、折曲つた角がきら／＼と輝く。(コ
サツク)

夜の蛾がはた／＼と飛ぶ。テーブルや杯に衝突つては、翅から粉を播き散らす。
ある奴は、焔を飛びぬけて、光の魔圈を出で、暗闇の奥に掻き消えた(コサツク)

內外美辭名句叢書第七集(完)

大正六年三月廿七日印刷
大正六年三月三十日發行

定價金拾八錢

編纂者 山 川 均
賣文社編輯局代表者

發行者 鶴 岡 周 作
東京市京橋區南傳馬町二丁目四番地

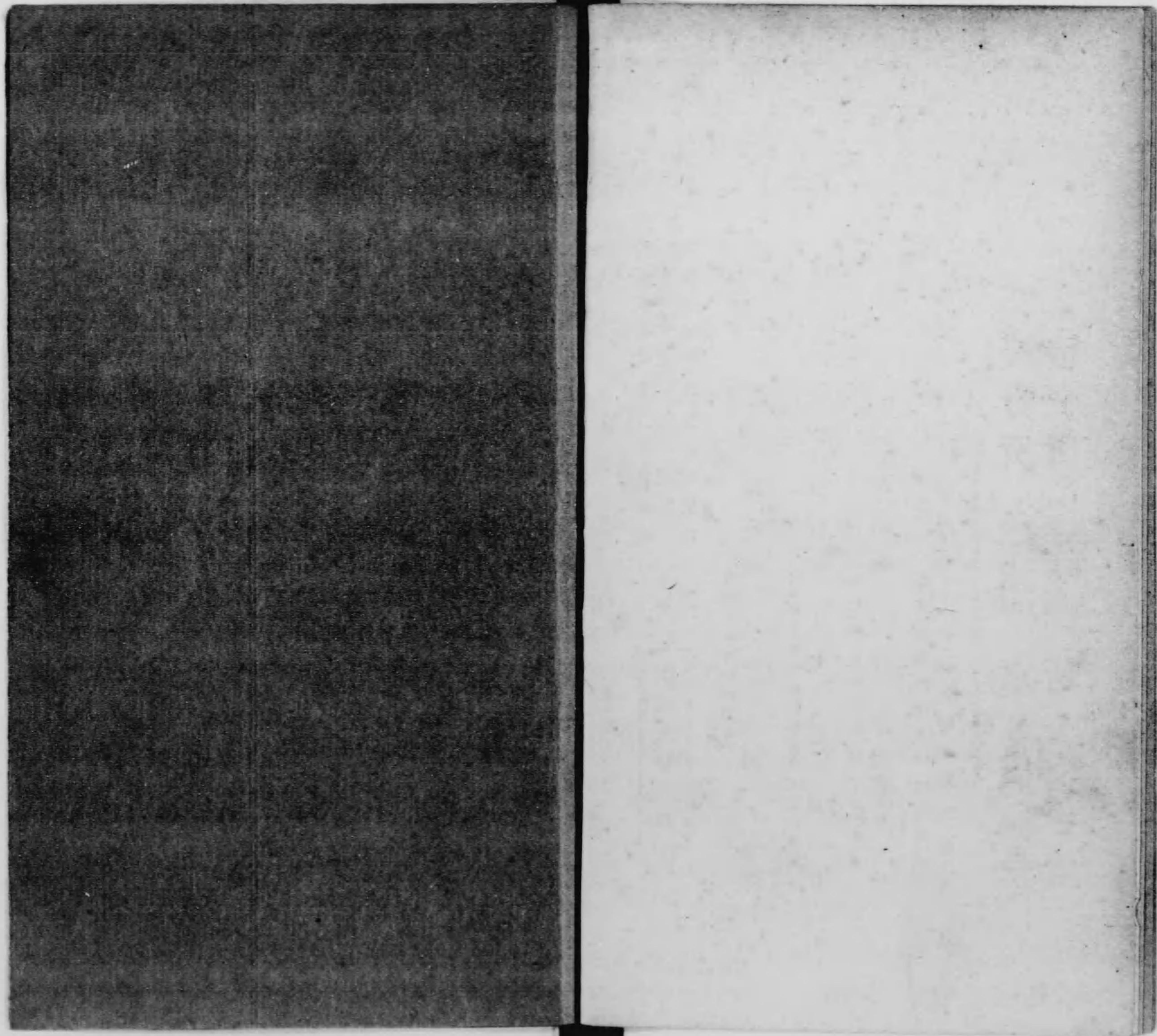
印刷者 守 岡 功
東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社
東京市本所區番場町四番地

發行所
發賣所

京橋區南傳馬町二ノ四
京橋區銀座
新橋

京橋
新橋
堂堂



東京新橋堂

12

364
126

終